
蝶々のつれづれポエム。

蝶々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶々のつれづれポエム。

【Nコード】

N7932K

【作者名】

蝶々

【あらすじ】

つれづれなるままに書き連ねる蝶々の超不定期かつ超フリーダムな詩のようなもの集。結構ノンフィクション実体験だったりします。

「後ろ姿」「but・・・」

「後ろ姿」

ねえ

また身長伸びたでしょう
髪の毛くるくるしてるし

制服忘れたの

ジャージのままじゃない

大きな背中を眺めながら

もしも

私の目線に気付いてくれたなら
振り返ってくれたなら

そのときはこう言って

何見てんだ

ってね

++*+*+*+*+*+*+*

「but・・・」

好きだよ？

ココロから好き

そうじゃなきゃいつまでもこんなに好きじゃ無いよ

けどね

いつも見せるあなたの横顔が

小さな警告を鳴らしてるの

あなたの目線の先には 何があるかな
って

いつも 目で追ってしまう

いつもいつも

私は後悔するの

うん 知ってるよ

あの子なんだよね

あなたの

ココロに住んでいるのは

「後ろ姿」「but・・・」(後書き)

「後ろ姿」

ものつすごい実験です。

しかも妄想爆発です。

これを書いたのはもうかれこれ一年半ほど前ですが、よく憶えてますよ。

すごくインパクトありましたから。(自分の中で)

「but・・・」

コレも実験。

なぜ「後ろ姿」とは相反した内容なのかというと、片思いだったからなのでーす。

浮き沈みの激しかった頃の作品が多いので、なんだか思い出します。色々思い出します。

・・・うう。↑墓穴掘ってる

「ホッチキスの旅」「遠い背中」

「ホッチキスの旅」

ホッチキスかして

後ろからあなたの声が聞こえて

もちろん

かさないわけがないでしょう

はい

さんきゅ

ピンク色のホッチキスは彼の手に移った

しばらくして

ほい　さんきゅ

ホッチキスは帰ってきた

私の手に当たった朝練直後の彼の手はあったかかった

それ以上に

ホッチキスもあったかくなっていたのが

私は嬉しかった

小さな幸せ いっぱい掴んで

「遠い背中」

遠いね

アスファルトとタータンの上を走りながら
貴方の背中を探して

足の速い貴方
足の遅い私

差はどんどん開いて

ああ

試合中に 待って なんて言えないけど

いつか

貴方の横で走りたい
貴方の横で歩きたい

やっと見つけた貴方の背中

もう下り坂の向こうに消えていたね

「ホッチキスの旅」「遠い背中」(後書き)

「ホッチキスの旅」

完全実話。

ごめん「あなた」。

勝手に書きちゃったよ私。

↑

「遠い背中」

この副題結構気に入ってます。

ついでに言っと中身は完全実話。

って言ったら年齢バレマスかね？笑

「棚の上の」「席替え」

「棚の上の」

ふいに

キーボードを打ちながら上を見た

薔薇の飾りがついた小さな箱

前はオレンジのハンカチが入ってた

張り巡らされたワイヤーに蒼と紫のビーズがついた籠
前は飴が入ってた

ねえ

去年のホワイトデーから1年がすぎたね

今年はなんであげなかったか気付いてるかな

もちろん なんてかは言わないけど

好き

大好き

その言葉を今年は伝えられなかったけど

どうか気付いて

私の

限らない想いに

6年越しの想いに

鍵のついた扉の向こうにあるものを

どうか

「席替え」

また遠くなっちゃった

2年生最期の席がえ

やんなっちゃうなあ

一番前と後ろから2番目

遠い あなた

なにもかもが 遠くなるね

家も

身長も

心の距離も

サヨナラ

なんていわないけど

大好き

だつていえない

ああ

でも
でも

誰よりもあなたが好き

私の心の中だけでなら
そう思ってたでもいいかな

「棚の上の」「席替え」(後書き)

「棚の上の」

うわぁ精神不安定ですね笑

これ書いた時期、色々ありまして。
でも実話。

「席替え」

いつの2年かは訊かないでくだしい。↑

えーちなみにこの恋はサヨナラも大好きも言うことなく玉碎しました実話です。

「夢」「間違いの先に」

「夢」

夢を見た

あなたが突然裏切る夢

もちろん夢の中の話

あなたが

お前のこと愛してる

なんて私にいいながら

違う女の子とキスしてる

涙が出た

止まらなかった

私は走った

でもあなたは 追いかけてこない

それが

それがあなたの答えなの

そう心の中で叫びながら

目を覚まして

私は泣いた

静かに

隣にあなたがいないことを確かめながら

そして

これが

本当にならないことを祈りながら

「間違いの先に」

I t h i n k t h a t

英語の授業で

タイミングを間違えて

I

だけと言ってしまったあなた

I

愛

その先に

私の望んでる言葉がある

そのたったひらがな五文字を

言ってくれる日は来るのかな

ねえ

You know that I love you

でしょう

お願い

もう返事がほしいの

ワガママかな

でも どうか

私の初恋に

6年という永い時に

ピリオドを打ちたいの

それがたとえ

NOでも

YESでも

「夢」「間違いの先に」(後書き)

「夢」

あー。

わかりやすいフィクションですよええ。

だって裏切るとか以前に付き合っていないじゃないか蝶々君。

↑

「間違いの先に」

UPしようか真剣に悩んだ恥ずかしい作品。

ほぼ実話なのが悩みの種 ↑ W W

「気配」「空席の面影」

「気配」

後ろに気配がした

何気なく立つ貴方

鳥肌が立つようなオーラ

怖いんじゃない

嬉しいの

何も言わずに

後ろでいてくれる貴方が

優しくて

守ってくれてるみたいで

でも

貴方がそれをしてるのは

ただの愛情

義務のようなもの

本当に焦がれるほどに貴方が好きなのは

私のそばにいつもいる 私と同じ名前の子

そして

貴方の後輩が 愛してやまない可愛い子

今この瞬間

貴方に何を伝えても

きっと伝わらないんだろうね

私と貴方の間には

気持ちとあのこと後輩という

コンクリートの壁があるのだから

たとえ穴を開けたとしても

貴方は何億光年も先のあの子に気持ちを捧げてしまったのだから

だから

どうか離れて

私の背中から

私の心から

「空席の面影」

今日

貴方は欠席した

心配になった

大丈夫かな

私の席から見える貴方の席には

貴方がいるように見える

錯覚だつてわかつてても

つい 声をかけてしまいそうになる

でも

ふっと見直すと

もうそれは無くて

今日何度

ため息をついたことか

こんなに寂しいなんて

私もどうかしちやってるわって

そう思えるほど

貴方が

好きなんだって

こんなにも

貴方が好きなんだって

どうか

明日は

来てほしい

貴方に 伝えたいから

「気配」「空席の面影」(後書き)

「気配」

これ書いたときはフィクションだけど実際には似たようなシチュが
何度も・・・汗

「空席の面影」

実話を基にしたフィクション。

欠席はほんと。

錯覚は嘘↑ええ

「願わくば」「ショートヘア」

「願わくば」

もうあと1年

ほとんど切ってもたけど

あと1年のうちに色々ある

入学式 校外学習 修学旅行 合宿 体育大会 文化祭 合唱コンクール 府下駅伝

クラブ引退までの全部が 最期になっていく

もちろん 卒業までの全部を含めても

明日を境目に

毎日が最期

もう終わってしまった最期もある

新人駅伝 郡市駅伝

もう

すでに未来を見据えて

足音を立てて歩き出しているけど

どうか

変わらないで

いつまでも

この

学校が

私の世界だから

私のすべてだから

私の居場所だから

まだあと1年あるけど

この場所が大切だから

どうか

願わくば

私たちがいつまでも

“大家族”であらんことを

ただひたすらに 願いながら

「ショートヘア」

髪に込めた想いを

私は捨てた

気持ちも

恋することも

正直な私も全部

何もかもを投げ捨てて

何もかもを放り投げて

何もかもから逃げ出して

一体

私は何を選んだのだろうか

「願わくば」「ショートヘア」(後書き)

「願わくば」

大丈夫です。

意味不明大歓迎。

むしろ内容わかつちやったら身元割れます↑ええ

「ショートヘア」

ちょうどこれ書いた時期に髪を切ったんだろーなと思います。

でも髪に気持ち込めてたかどうかは定かではないですよ↑まさかフイクション？

「薄れて」「TOUCH ME」

「薄れて」

輝きが

薄れていく

遠くなるほど

私の想いに反比例して

何も

たとえ何を引き換えにしようとも

あきらめることなんてしなくなかったのに

「TOUCH ME」

ねえ

気付いて

貴方まで あと3mm

その距離を耐えるのに

どれだけ苦勞するか

今日だってそう

わりイ って走ってくる貴方の手まで

たった3mm

つい

触りたくなる

本心を

欲望を押さえるのに

一体

いつまで耐えればいいの

もしも

この想いが届いたあとだったなら

強く抱きしめて

甘いキスして

ねえ

いつまで

私は耐えられるかな

「薄れて」「TOUCH ME」(後書き)

「薄れて」

あー。

ダークですねえ。

浮き沈み激しかったあの日あの時って感じです。

「TOUCH ME」

他サイトでの掲載時とは改題してあります。

うつっわ？

欲望ってナンですか——ッ↑誤魔化すな

抱きしめるなキスするな耐えろってか絶えろ——笑

「時計」「写真」

「時計」

あたしに 何ができるの

この恋は 叶わないとわかっているのに

もう

見つめることも

触ることも

話す事すら許されないのに

これ以上

あなたがいない毎日

何も意味が無いというのに

まだ

あたしに 頑張れなんていうの

知ってるくせに

あなたが大好きなのに

あきらめろと言われて

あたしがどれだけ傷ついたのか

何も知らないあなた

あなたのヒトが

そんなこと言うから

あたしは壊れてしまったの

本当に 何も知らないのね

愛してる

そう思うことすら禁忌なのに

時は

時に残酷ね

あの頃は あんなに楽しかったのに

一瞬で あたしは裏切った

一生 苦しむことになると思いながら

「写真」

クラス写真が届いた

うそつき

あなたの写真は

クラス写真のあなたは

笑ってた

でも

私知ってる

この5分前

あなた泣いてた

桜みたいにきれいな涙

はらはらと散って

惜しむように

でも惜しまずに

泣いてた

見てしまったの

ごめんなさい

でも

私だって泣きたい

今だってそう

失恋の痛みは

あなたにだけ襲ってきたわけじゃないんだから

なのに私も笑った

無理した笑顔

顔にへばりつけたみたいなの

そんな笑み

2人おそろい

でも

こんなおそろい 欲しくなかった

できたのならば

あなたと

笑った顔が欲しかった

心から

素直に笑った写真が

「時計」「写真」（後書き）

「時計」

言うことなし↑単に恥ずかしいだけ
ちなみにこの登場してる「あなた」とは初恋の野郎で私にあきらめ
ると言っただのは「あなたのヒト」ではなく。
女じゃないですよ。
ああつても正体は言えないです。

「写真」

クラス写真はホントですが、泣いてたというのもお揃いというのも
完全フィクションです。

写真撮る前は友人達と大爆笑してはりました。↑何故京都弁

「消え行く想いの果て」「告げる」

「消え行く想いの果て」

遠くなる

小さくなる背中

大きいって知ってるけど

小さくなる背中

届かない

歩いても

走っても

叫んでも

手を伸ばしても

どうして

こうなってしまったのだろう

私が

あきらめようと想う度

貴方は 意識せず近寄ってくる

歩調を

合わせてくれている訳でもないのに

なんで

こんなに

貴方は離れていってしまうのだろう

無い物ねだりなんて

うまく言ったものだわ

我儘だよ

知ってる

直したいけど

直らないの

貴方がいつそ

遠い遠い彼方へ行ってしまう方がいいのに

そうやって

忘れようとするたび

貴方は

貴方は

なぜか私と歩調をあわせる

貴方は

あの子が好きなんでしょう

お願い 来ないで

私に 歩調を合わせないで

「告げる」

今

貴方に

愛してる

なんていったら

嘘になりますか

本気で言っ たとしても

嘘になるのですか

どんなに詰め寄っても

どんなに近づいても

嘘になりますか

この想いを

貴方は嘘だと思って

突き放すのですか

そうやって

また私を捨てるのですか

愛しているのに

私はやっぱり

捨て駒だったのですね

「消え行く想いの果て」「告げる」（後書き）

「消え行く想いの果て」

ないものねだりという奴です。↑それで済ませるか
でもほんとにそうなんですよねえ。

ここまで濃密なノンフィクションもないですよ。

「告げる」

後半部分「また私を」は嘘です。

この文だけ嘘です。↑中途半端

他は結構マジだったりしたりしなかったり↑えええ

「言えないのは」「いやよいやよも好きのうち」

「言えないのは」

ひとつ年上の貴女

オレからの貴女は

うつすら笑うトコとか

遠くを見つめてるトコとか

とても綺麗で

だけどオレは言わない

言えない

言わない

言いたくない

貴女が傷ついてしまうのは

もうわかってるから

もう見たくないんだ

貴女の真実を

「いやよいやよも好きのうち」

あなたなんてきれい

だいっきれいよ

気付いてないフリして

私の気持ち

そんなSオトコのことなんて
眼中に入っていないもんね

だからだいっきれい

私だって

気付いてやんないから

あなたが折れるまで

知らないフリしちゃうから

「言えないのは」「いやよいやよも好きのうち」(後書き)

「言えないのは」

某少年の私の同期の女の子に対する恋心をぶつけてみました。
(あんたがぶつけてどうする)

「いやよいやよも好きのうち」

えーっとこれなんだっけ。

内容は多分なんか小説読んだときにひらめいたやつかと。
ちなみにサブタイトルはお気に入りに入り。

「消せない消しゴム」「ポッキー」

「消せない消しゴム」

消せるなら

消してしまいたい

私の消しゴムで

もし私がアンドロイドだったなら

スイッチ1つで消せたのかしら

息を吹きかけたロウソクのように
薄くなった虹のように

幸せだったあの日々を
輝いていたあの季節を

貴方との想い出を

「ポッキー」

スーパード

あ ポッキーあるよ

何だよ 欲しいのか

うん

だって

ポツキーゲームしたいじゃん

ばあか

するか んなもん

なんでよ

いいじゃない

あほ

恥ずかしいわ

貴方はそう言いながら

買い物カゴにポツキーの箱を入れた

わ やらしー

うつさいだまれ

家に帰ってから

もう夜中じゃん

ああ

ホントだな

ねえ

ポツキーゲーム 布団でしない

しねーよ

即答だった

でも

もちろん

そんなのウソで

朝になった頃には

買ったばかりの肉は痛んじやって

ポツキーの箱だけが

机の上に乗っかって

布団の上の菓子くずを取るのに苦労したね

「消せない消しゴム」「ポツキー」（後書き）

「消せない消しゴム」

フィクションです。

ずいぶんシリアスに走ってますね。

「ポツキー」

コレがフィクションじゃなくなにがフィクションだ↑言い切るのか
しっかし上記の「消せない」とはまた打って変わったスタイルの
フィクションですよね・・・。
正反対じゃねーか。

「ばんそうこう」「黒い檻」

「ばんそうこう」

指にキズテープ

目の下のくま

心配しないで

大丈夫よ

ちょっと訊かないでよ

貴方のためなの

言えるわけないじゃない

内緒の作戦なのよ

だって

夏には

一緒に浴衣着て

花火大会に行きたいんだもん

大好きな貴方のために

ね

「黒い檻」

黒がスキ

想いも

記憶も

何もかもを飲み込んでなお

自分を保ちつつける

全部を丸々飲み込んで

まだ物足りないってわめき散らす

黒く染まってしまえば最後

もう白に戻るなんてできない

そんな色をまといながら

今日も私は歩く

「ばんそうこう」「黒い檻」(後書き)

「ばんそうこう」

フィクションです。

浴衣なんて作れません！↑ええええっそこかよ

「黒い檻」

この頃はゴスじゃないですが黒いのが好きでした。

その頃の名残で今もけっこう黒い服着てますが喪服じゃないですよ。
ちなみに最近深い緑とかグレーとか紫とか好きです。

渋いねと言われました。↑じつは少しショックだった

「紳士的な彼女」「淑女的な彼氏」

「紳士的な彼女」

スキ

君にそう言ったら

いまさら

なんて言われるのだろうか

何回でも伝えたい

いつだって

かつこよく決めてて

オレより男らしい

だけどたまに

ちよっぴり弱いトコ見せる

そんな君を見失わないように

オレはその背中を見つめ続けてる

君の名を呼んだ時

ん なあに

って 振り返ってくれるように

「淑女的な彼氏」

いつも

貴方の眼を見てる

女らしい感じで

私より女っぽい外見なのに

守ってやるから安心しろよ

って眼しちゃって

もう

十分 守られちゃってるよ

ねえ

気付いてないでしょ

私のほうが男っぽい

なんて言っちゃって

貴方の方がカッコいいのに

守ってくれてるのに

男っぽいのは

貴方よ

安心してね

見失わせたりしないから

「紳士的な彼女」「淑女的な彼氏」（後書き）

「紳士的な彼女」

タイトル超お気に入り。

今度このタイトルで小説書いてやろうかと思っています↑ネタバレ
かよ

中身は・・・まあ初期の頃の作品なのでごによごによ。

「淑女的な彼氏」

このタイトルも気に入っています。

というかセットでお気に入り。

中身は断然こっちのが好きです。

女の感性は鋭い。

気付いてないじゃん男！！↑まあまあ責めるな笑

「Blue Rose」お帰り

「Blue Rose」

蒼い薔薇なんて

自然界にはいまだ存在していない

“不可能”

なんて代名詞がつくほど

それは永い事おとぎ話にされた

ならば

僕のこの恋も

蒼い薔薇なのだろうか

世界から見放された

小さなビンの中に

閉じ込められて

永い時を

貴女を見ずに

過ごさなければならぬのだろうか

暗い闇の底に

たつた独りきり

ただひたすらに

貴女だけを想いながら

「お帰り」

お帰り

ねえ いつ帰ってきたの

>さつき

なんか久しぶりな感じだね

>そんな事無いだろ

いつに間にか

かつこよくなつた感じ

>なんか訳わかんないな

なに心配した顔してるのよ

> いや だってさ

心配しなくても愛してますよ

> 不倫 してないだろうな

もう

何言ってるの

あなた以外なんて愛さないもん

> ほんとかよ

わかってないなあ

ベッドで証明して見せましょうか

> じゃ 遠慮なく

もちろん

証明は完璧で

シートと気持ちの隙間は

ちゃんと埋まった

「Blue Rose」「お帰り」（後書き）

「Blue Rose」

単に青薔薇の話を書いて、書きたい！と思った一発書きの作品という記憶が強いです。

「お帰り」

なんかチャット形式みたいな感じで書いたのが面白かった記憶があります。

「エ」「激しい想い」

「エ」

愛って何

恋って何

相手にキスしたいって思うのが恋？

相手を抱きしめたいって思うのが愛？

じゃあ恋愛って何

溺れるほど墮落して

カラダを求めるのが恋愛だというの

そんなのは信じない

私は

恋愛は

静電気みたいに

静かに

甘く秘めやかなキスと

お互いのココロを求めるもの

私は

そう信じてる

「激しい想い」

行かないで

行っちゃわないで

私を見て

いや 行かないで

ねえお願い

甘いキスしてよ

強くなくていいから抱きしめてよ

愛してるって言ってよ

もう最後なの

終わっちゃったの

お願い

さよならくらい言わせて

なんで

言わせてくれないの

あの桜の下で

私待ってたのに

貴方来なかった

もう逢えないの

最後にお願ひ

貴方を忘れられる魔法をかけて

貴方なしじゃ もう生きられない

だから私に魔法をかけて

二度と貴方に 巡り逢うことのないように

「エ」「激しい想い」（後書き）

「エ」

題はイマイチですが中身は大好きな珍しいタイプの小説。
結構文意味不明ですが。↑ダメじゃないか

「激しい想い」

激しすぎるわッ ↑そこかい

魔法なんかかけれるか！ ↑メルヘン何処

「世界から堕ちて」「残像」

「世界から堕ちて」

無性に

泣きたくなるときがある

父上に責められた時

恋を諦めなきゃって思った時

親友だっと思ってた子に無視された時

そんな時

私はどこにいるのかわからなくなる

ここはどこなのだろう

世界の果て

海の底

空の向こう

宇宙の彼方

ここはどこなのだろう

助けて

助けて

そう思う時がある

お前は知らない

必要ないじゃん

やめて

やめて

いやだ

いやだ

なにも見えない暗闇の中で

一人永遠に彷徨い続けるかのように

涙が出てきて

手を差し伸べて

誰か来て

そうつぶやいたって

誰も来ない

誰も来ない

暗闇に落ちて

泣いて

大丈夫かって

助けてくれるのはいつも

貴方だった

そうたとえ

暗闇におちた理由が

貴方への恋だったとしても

「残像」

いつてしまった

遠い遠い

世界の果てのようなところ

運動場を一人 歩きながら

ふと 後ろを見てしまう

そこに

まだ貴方がいるような気がして

練習してる カッコいい貴方が

でも いなくて

急に 会いたくなる

貴方の背中を見たかった

息もつけないほど

あたしを愛して欲しかった

振り返って

あたしのもとに来て

なにか言って欲しかった

なにも言わずに行ってしまったて

ああ

そうなんだ って

今更後悔しても遅いのに

いつそそれなら

もっと激しく

傷付けて欲しかった

あんな優しくじゃない

あんな優しさはいらない

好きになるんじゃないかって

後悔できるように

なのに今

好きになるんじゃないかって

後悔してる

嫌いになったんじゃない

恋しさが 止まらない後悔

たった三日

あの人がいなかったのに

こんなにも

思いつめてしまう

あたしは

馬鹿なんだろうか

「世界から堕ちて」「残像」(後書き)

「世界から堕ちて」

なんかでかい滝の話をテレビか何かで見たときに書いたんでしょう
なあ↑自信ないのか

これ書いたときはフィクションです。

でも結構核心突いたポエムだよね↑そうなのか？

「残像」

これ久しぶりに実話！

ふと懐かしさ蘇る小説です。

「囚われし者よ」「なんで」

「囚われし者よ」

——囚われし者よ

眠れる森で

気が狂うほど

願い続ける

私を見つめて

その口で 愛を囁いて

好きだよ

愛してる

キスしよ

なんでもいいの

私を

形だけでいいから

形式だけでいいから

愛してよ

その強い瞳で

私を愛して

好きだと

本当に愛してると

どうか囁いて

そうしたら

私だって諦められるかもしれない

本当なのね

じゃあ私 頑張るから

バイバイって

囚われた森から

出られたかもしれない

貴方はいつも

好きだったよと

愛してたよと

懐かしいねと

過去形で囁くから

いつまで経っても

踏ん切りがつかない

ねえお願い

たった一度でいいの

心の底から愛してるって

囁いてくれる日が欲しい

そう

たった一度でもいいの

もう貴方は私の傍にはいないけれど

もう貴方が隣に座ってくれることはないけれど

どうか

どうか

「なんで」

なんで

なんで

ねえ

どうして目が合うの

私と一緒に

あの子もいたよ

ねえ

なのに

どうして目が合ったの

歩きながら

あの砂利の上で

私と一緒に

五人も女の子がいて

なんで

私を見たの

穴が開くほど

私を見て

どうして

そらそうとしなかったの

反対方向を歩きながら

数メートル先

手なんか届かないと思って

貴方は見つめたの

ねえお願い

期待させないで

私諦めたいの

ねえ

お願いだから

なんであんなに長く

私を見つめたの

見ないで

そんな

澄んだ瞳で

真剣な眼で

見ないで

見ないで

先に目をそらしたのは私

好きだけど

言っではいけないと 知ってしまったから

「囚われし者よ」「なんで」(後書き)

「囚われし者よ」

なんか意味不明なもの。

今読んでも謎。

謎が謎を呼ぶ意味不明ポツポエム。ww

「なんで」

じつつわー！

これ実話！

ほんとびっくりしました・・・目が合ったときは！！

「恋の傷」「貴方」「あの空の向こう」「取引」

「恋の傷」

傷つかずに 恋なんてできない

傷つけずに愛したくても いつか傷つく時が来る

傷つけずに 恋なんてできないのだから

「貴方」

ねえ

どれだけ叫べば貴方に届くの

この溢れだす気持ちを

ねえ 気付いて

私のワガママを
貴方への想いを

「あの空の向こう」

あの空の向こうに君がいるなら
僕は叫んでやる

僕の気持ちを

宇宙の彼方なら

宇宙にも叫んでやる

本気で好きだった

今も

「取引」

アイシテルよりも

この強い気持ちを君に伝えられる

そんな言葉があるなら

何と引き換えにしようとも

僕は手に入りたい

その言葉を

「恋の傷」「貴方」「あの空の向こう」「取引」（後書き）

「恋の傷」

ちよつとコレ私にはいい出来じゃないか。

「貴方」

この間結果が出ましたが、気付いてはくれませんでした。はい。

「あの空の向こう」

割と大好き。

今この詩がじっくり来ます。

「取引」

意外と手に入らない言葉。

なにと引き換えにしたら手に入るのだろう。

「触れちゃダメ?」「キスしてよ」「終わる」

「触れちゃダメ?」

触れちゃダメなのですか

大きな手

広い背中

たった10cm

手の届く範囲にあるのに

触れちゃダメですか

愛してるって

好きって

伝えることすら

罪になるのですか

「キスしてよ」

きみに

すきだつて

しんじてほしいんだ

てがみならつたわるかな

よんだらわかってもらえるなんておもってもないけど

「終わる」

ああ

終わっていくのね

伝えることもないまま

伝えるすべもないまま

すべて終わっていくのね

貴方との恋ほど

貴方への初恋ほど

寂しかったものはなかった

そうして消えていく

さよなら

愛しい人よ

「触れちゃダメ?」「キスしてよ」「終わる」(後書き)

「触れちゃダメ?」

罪にはなりません「あなた」のある種の逆鱗に触れます。

「キスしてよ」

この頃縦読みがマイブームでした。
↑ ネタバレ
気付きましたか?

「終わる」

終わっちゃいました。
実話です。

「それだけのことが」「KISS
ME」

遠く

向こうに見えた貴方が

心なしか

どんどん離れてゆく

声をかけることも出来ず

ただ

笑う貴方を見ることがしか出来なくて

さよなら

もう逢えないね

自覚した

わかってたよ

そのくらい

だけど

遠く向こうの話だと思って

他人事にしてた

馬鹿だよ

知ってる

だから

言えなかった

たった二文字

好きが

「KISS
ME」

引き寄せて

強く強く

抱きしめて

キスしてとは言わないけど

ねえ

心だけでもいい

体だけでもいい

ねえ

抱きしめて

あたしのことが

あたしのことが

あたしのことが

嫌いなら

「それだけのことが」「KISS ME」(後書き)

「それだけのことが」

もう逢えないけど

逢えると思うよ

近いうちに

タータンの上で。

「KISS ME」

キスいらないうって言いながら

求めてるって

罪？

「ねえ」「突き抜ける風」

「ねえ」

ねえ

もう

もう

逢えないのかな

好きだけど

もう逢えないのかな

電車の方向だって違う

学校も違う

なにもかも違う

もう逢えないよね

だけど

貴方が消えない

あの日言えなかった

言えるわけない

私なんて見えてない

陸上しか見えてない奴に告白することほど

私にも貴方にも

酷なことなんてないよねえ

ねえ

今なら言えたかもしれない

本気で

好きだったのよ

「突き抜ける風」

そんなの知らない

愛してるけど

貴方がどうかなんてわかんない

曇った空

どんよりと灰色

透き通るような空をしてるのは

貴方を見かけたときだけ

だけど

踏み切りのけたたましい音

心の中でうるさく叫ぶ

もう逢えないのに

もう

私のことなんて忘れて 陸上に夢中なんでしょうけど

私は忘れてないの

片時も

片時も

ただ

私の横にも

同じ風が吹き抜けてる

赤茶色の

広い四百メートルトラックの上で

タータンの上は

ちよつとゴムくさくて

鉄板みたいに熱いけど

ねえ

いつか

穴が開くほど見つめられたね

あの瞳はもう

遠い彼方にいるけれど

いつも

私の横に

私の後ろに

貴方がいて

背中を押してくれた

突き抜ける風のように

「ねえ」「突き抜ける風」(後書き)

「ねえ」

これは間違いなく私の現在です。
もう現段階で初恋終了でしょうか。
諦めたくなかったですけどねえ。

「突き抜ける風」

陸上経験者には欲しい風ですねえ。
背中押して欲しかったけど
もう無理なのね？
知ってたけど
ちよっとくらい見て欲しかったな。

「似てる声」「遠ざかるなにか」

「似てる声」

後ろ手に

懐かしい声

だけどどこか低くて

よく似た声 なんて

音楽でも聴いてるみたいに

そっぴい

前にもこんなことあったな

体育倉庫のところで

黙って

立ってたなあいつ

懐かしいなあ なんて

日よけタオル握りしめて

あときは

早く離れてほしかったけど

今は

誰かもわからない声でも

聞いていたかった

赤い帽子

急に転がってきて

反射条件に

キャッチして

競技場内スタンドの

一段上の席

手渡した

よく似た声の彼の席

あ

先にそう言ったのは君で

なんやお前か

誰が拾ってくれたんかと思たら

跳び跳ねた胸

こんな

近くにいて

気付かなかった

たった一ヶ月で そんなに声って

変わるのね

あときは

優しくしないで

って思ってた

けど

ねえ

あたしの名前

呼んでくれて

ありがと

離れたくなくて

一時間くらい

ずっと席に座って

幅跳び見てるふりしながら

貴方の声を聴いてた

貴方がその席を離れるまで

心に染み込ませて

学校も

なにもかも離れたから

ちょっとしたお守りか元気ドリンクね

ごめん

大好きな人

もう少し

好きでいさせて

「遠ざかるなにか」

遠のいていくね

なにか

なんて訊かないで

恋心

貴方に対する

だけど

忘れられない初恋は

露のように

ぱっ

ぱっ

落ちていく

ああ

どうしてあの日

言えなかったんだろう

「似てる声」「遠ざかるなにか」（後書き）

「似てる声」

すいません、これは実話でありリアルタイム配信に近い感じですが、今日の出来事です。

「遠のくなにか」

うっこれもメンタル面ではリアルタイム配信・・・。
はっ初恋なんてなんて愛らしい響きかしら。

そんな冗談が言えないほど、追い詰められたりもするんです。

「今すぐ」「うしなっ たなにか」

「今すぐ」

いますぐ

あたしを抱きしめて

その浅黒い肌で

その力強い腕で

ギュって

力強く

だけど知ってる

そんな関係にはなれないこと

締め付ける

締め付ける

私の心を

肺だけが

貴方に握りつぶされたみたいに

苦しくて

息が出来ない

今すぐ

逢いたい

叶わないのは知ってるんだけど

だけど

だけど

しだれ桜に縛られた私が

貴方を求めて

飛んで行きそうになる

呪縛を解いて

ただ

貴方の胸へ

だけど

叶わないことは知ってる

だけど

今もまだ離れない

貴方のまっすぐな目

私を射抜いた

その澄んだ瞳が

私を縛って離さない

抱きしめて

桜じゃなくて

貴方があたしを

「うしなっ たなにか」

閉じられた本

失っ たなにか

一冊には

悲しく淡い初恋が

一冊には

苦しく甘い恋愛が

別れが

あつた

その瞬間の

弾けたなにか

はじけとんだ

弾け飛んだ

ぱんと

音がすることもなく

ふつと

静かな無音でもなく

なにかが

私の中で消えた

なにを失ったんだろう

なにか

わたしを

解き放したんだろう

一陣の風

逢いたい

ぷにっとした反面何故か節ばっている指

短くするまではくるくるだった天パな髪

くりくりしてて真珠のようだったその瞳

いつだって私の中でゆったり響く低い声

いまだって

そのどれも忘れていないのに

あきらめなきゃ

どうして

そう思わなきゃいけないの

片時だって忘れたくないのにどうして

あきらめないといけないの

いちいち

まっすぐ見ているのね

ただ

愛してるだけなのね

私は貴方に魅入られた

貴方は陸上に魅入られた

ただそれだけの理由が

私をあきらめさせようとする

今だって

私の心の中で

貴方は笑っているのに

頂点の一つが人じゃなくても

トライアングルラブが成り立つ

なんて

なんて悲しい

貴方が好きだった

あの日言えなかった

あの日言えなかったその一言が

私を

こんなにも後悔させる

ただ

好きだったただけなのよ

忘れなくなかった

忘れてなんかない

貴方はもう

私のことなんて忘れちゃったんでしょうけど

閉じられた本

閉じたのは

失ったのは

なに

「今すぐ」「うしなっ たなにか」(後書き)

「今すぐ」

直感で書いたものです。

縛ってるのは

他の誰でもない

貴方なのに。

「うしなっ たなにか」

ぱりんと消えた

そんな初恋だったのかもしれないと
今なら思います。

「好きだ」「突風」

「すきだ」

そう言えたらいいのに

ああ言えたらいいのに

もし

君に伝えられたなら

そう思うたび

自分のさだめを思い知る

言い訳だとは 知っていながらも

君を思わずにはいられない

ああ

愛してる

そんなくさい言葉で

伝わるかなんて

僕にはまだ

わかったもんじゃないけど

お願いだから

どうか

聞いて欲しいんだ

雑音にまぎれた僕の心が

伝わるのはいつになるだろう

「突風」

髪がなびく

暴れるって言うべきなのかな

ぶわっと

自由飛行する私の髪

短く切り落とされて三年

長かった頃

いつだったか

貴方に触れられて

ああ

絶対切らないわなんて

ありきたりでかわいいことを言っていたのに

いつだっただろう

自分の中で諦めが始まったのは

腰まで長く伸ばした髪を

しゃきしゃきと

簡単に

我が身から離れていく

あの日

去っていった長い髪が

一緒に

初恋を連れ去ったように思っ

ただ

今でも

貴方がいる

貴方はもうこの街にはいない

わかってるのに

残留思念のように

私の中に 棲んでる

いえなかったことが

いまさらつらくて

なにも

かんがえられない

なにも

なにも

ああ

もう考えられない

貴方のことしか

風に舞う私の髪

いつそ

すべて持って行って欲しかった

なにもかも

私にただ一つ

風を切るような

辛くて

苦くて

淡くて

甘くて

大切に

綺麗で

鮮烈で

強烈で

美しく

鮮やかで

眩しくて

苦しすぎて

懐かしくて

忘れられない

痛みだけを残して

「好きだ」「突風」(後書き)

「すきだ」

久しぶりの少年目線。

じつは男サイドからかくのはだーいすき。

だけど懐かしさが蘇るのは、誰のせい？

「突風」

風に吹かれてなびいたのは
私の髪

残された痛みも
風に沁みて

痛い

「灰色のタータンで」「空からの涙」

「灰色のタータンで」

雨は嫌いよ

いつだって

あの日を思い出して

雨に濡れるタータン

暗い空

どんよりとして

濡れそぼった髪が

黒が

夜闇のように雨粒を

朝露のように落とす

光らない空は

どこか苛立って

ただばつばつとやかましく

タータンが踏まれて悲鳴をあげていた

雨の中のレース

もう

濡れすぎて感覚もない

踏んで飛び散った水溜まりだけが

私をあたためた

何度も何度も通り過ぎたゴールは

なかなかゴールに変わってくれなくて

ひどく長く

その試合は結局最悪

痛む心

冷たい雨

痛くて

涙がにじんだのは

誰のせいなの

あのあと食べたライトミール

ぽそぽそしてて

いつもよりまずく感じる

いつもは

甘くておいしいのに

雨の味しかしなくて

違う水が私の喉をつるおすから

まずくて

アスファルトの上

すれ違った貴方は

おつかれ

しか言わなくて

ううん

言いがかりだね

八つ当たりだね

もう一年も前の話なのにね

誰も気付かない

私はここににいるのに

誰よりも

気付いて欲しい人がいるのに

雨は嫌いよ

思い出させるから

「空からの涙」

落ちてくる

その雫が

嵐を呼んでくる

風が通り抜けるだけ

なのに

水滴が飛び散る

いつか誰かが言った

空が泣いてる

梅雨には珍しく

晴れ間

と　い　う　か　雲　ひ　と　つ　な　い　真　夏　日

ば　っ　ば　っ　と

雨　は　降　り　注　い　だ

い　っ　だ　っ　て

思　い　出　す　の　は　貴　方　の　笑　顔　だ　け　よ

「リトル・ブルーバード」 Little Blue Bird

「リトル・ブルーバード」

とんでる

教室の窓から

鳥が一羽

私も

飛んでみたい

翔んでみたい

広い空に

その白い羽を

なんの穢れもない

純白の羽で

ぶわりと

逃げるように

キレイニナリタイ

貴方のそばにいられるくらい

飛べやしないのに

「Little Blue Bird」

すぐ横を

後ろから

追い抜くように一羽

小鳥が飛んだ

突き抜けるような

その飛び方が

うらやましかった

音もなく

すべるような滑空で

晴れ間一つない

梅雨空のリンクをすべる

私も飛ばせて

翼が欲しい

ワタシトアナタシカイナイセカイ

行きたい

遠い遠い

空の最果てへ

自由しか知らない

小さな小鳥のように

「リトル・ブルーバード」 「Little Blue Bird」 (後書き)

「リトル・ブルーバード」

ブルーよりも

穢れた羽

そんな私が飛べるはずない
そう確信させたのは

誰

「Little Blue Bird」

グレイのセカイでも

飛べたなら

それでよかったのに

「傷痕」「広い海」

「傷痕」

いまも

残された爪痕

数十枚という写真のなか

私は怯えた

これが

本当にあつたことだというの

飛沫が

赤い飛沫

バシユと

聞こえそうなほど

遠い話じゃない

そんな

過去の話じゃない

心に刺さる

刺さったまま

離れない

銃弾

手記を手に取りれば

あの頃が蘇る

生々しいほど

赤い世界

黒い世界

もう

一年になる

沖縄での フェンス

ごうごうとつんざく音

もう一年なんだ

あの日

降りしきる雨の中

闇が

私を包んだ

忘れられない

あの言い知れない恐怖

はぐれた私を襲った

無音の悲鳴

あの日

そばにいてくれたのは

君だった

薄暗いライトが

一層

恐怖心を掻き立てる

助けて

そう言ったのは

写真か私か

本当にあつたことなのか

この日本で

本当に

あつたのか

怖くて

今日も夢が闇になる

六十五年

その月日は

なにを意味するのだろう

なにを物語るのだろう

なにを訴えるのだろう

なにを伝えてくれたんだろうか

「広い海」

切り開かれた視界に映った

それは

研がれたような

切り立った崖

天使が

そこから何十人何百人と

舞い落ちたそうだ

舞い降りたでも

飛び降りたでもない

舞い落ちたそうだ

白百合という名の

姫たちが

舞い落ちたという

ガラス越しに見た

その話を

他の人は

どう思ったのだろう

高い高いそこに

天使のはしごが降り注いだ

どうして

どうしてあの時代に降り注いではくれなかったのかと

希望がない

あの人が言った

そんな時代に

忘れてはならない

海の秘密を

「傷痕」「広い海」（後書き）

「傷痕」

沖縄戦終戦から六十五年ということで、書かせていただきました。平和祈念資料館での、私の実体験です。

捨て駒、唯一の地上戦。

当時の日本の闇を忘れようとしている世代の中で、忘れてはいけないこと。

傷痕に触りたいと思うのではなく、
どうしてそれが付いたのか、つけない方法があったのでは。
そう思わなければいけないと思います。

「広い海」

こちらの、崖、も平和祈念資料館施設内から望める崖をモデルにさせていただきました。

白百合という名の姫、でピンと来られた方もいらっしゃると思います。

本来はひらがな表記なのですが、あえて漢字で書かせていただきました。

映画などでよく、百合の花束を崖の上からばら撒くというシーンがあります。

そんなシーンを見るたび、思い出すたび、忘れてはならない使命も思い出します。

もう一度、学びなおしたいです。

「いじわる」「あたたかい息」

「いじわる」

めったに逢えないね

すきだよ

そう言うチャンスもない

好きなのに

告げられるチャンスがない

私のことなんて

もう

忘れたでしょう

思い出さえ捨てさせてもくれないくせに

「あたたかい息」

はあ

耳に

息がかかる

そんな感覚がした

誰もいないのはわかってるのに

寂しさが私を支配して

ときめかせる

なんて男なの

もう

六年も

片思いが続く

まだ忘れられない貴方が

私の隣にいる気がして

蒲公英色の

マニキュアを塗った指で

ぎゅっと

服の胸元を握り締めた

「いじわる」「あたたかい息」(後書き)

「いじわる」

薄れ始める頃に

貴方に逢ってしまうの

運命なんて思わせないで

「あたたかい息」

いつだってそう

ずっと私のそばにいたのね

「鮮やかな瞬間」「キスをしよう」

「鮮やかな瞬間」

めくらない

めくられない

めくるの忘れてた

そう自分に言い訳して

まだ四月のままのカレンダー

めくったら

終わってしまいそうな気がして

忘れてしまいそうな気がして

懐かしい

まだセーラー服に深緑のリボンタイだった

皆

ダサいなんて言っただけ

卒業前には

誰も脱ぎたがらなかったじゃない

懐かしい思い出

ただ

認めたくなくて

あの日々が

楽しかった

恋をした

泣いた

そうやって

思い出になっていくことが

私の中で

小さな

思い出になっていくことが

遠のいたあの場所

前を通るたび

小さな思い出になっていく

もう

新人生がいて

あたしたちの居場所はない

だからこそ

怖かった

もう

振り返れないことが

そこにはもう

違う世界が広がっていて

あたしたちに

還る場所は

もうない

まだ新学期が始まる前の

まだクラブに走りにいつていた

あの日のまま

時を止めたカレンダー

もう

戻れないことくらい

気づいていたはずなのに

今でも時折思い出す

まだ輝きに満ちていた

目標があつた

一瞬一瞬 色があつた

鮮やかなあの日々を

「キスをしよう」

キスをしよう

なにもかも忘れないうちに

「鮮やかな瞬間」「キスをしよう」(後書き)

「鮮やかな瞬間」

片時も

片時も 忘れたことはない

「キスをしよう」

世界一短い詩を

君に

「僕の心の」「PM9:37」

「僕の心の」

触れたい

この手で

激しく

愛しいと思うたび

胸が

苦しい

君には

もう

心に決めた人がいるのに

僕は

まだ

薄雲のかかる

恋心を抱いている

君の名のような

恋心を

「PM9:37」

夜闇に揺られる

ゆらゆら

ゴトゴト

疲れきったサラリーマン

新聞を読み漁るかのような商社マン

うとうと船をいぐー

そして わたし

恋に立ちすくむわたし

わたしはどこにいるのだろう

揺られるこの恋心に似たこれは

どこに行き着くんだろう

まあ

終点だけど

あの人たちは どこにいくんだろう

わたしは どこにいくんだろう

蝶のついたこのブラウンのヒールサンダルが

連れてってくれるとは思えない

連れてってくれるとは思わない

連れてってくれるのは

わたしのうち

目の前の高校生さん

わたしを連れてってくれないかしら

わたしを

誰か

解放して

自由な

夜の大空へ

星も瞬かない

月も見えない

夜の大空へ

「僕の心の」「PM9:37」(後書き)

「僕の心の」

遠のいた心

一輪の花

「PM9:37」

コウモリすら飛ばない
夜闇の中でもいいの

連れてって

どこまでも
どこかまで

「沸点」「融点」

「沸点」

久しぶりの母校

偶然に偶然が重なった

え　なんで皆いてるん

いやたまたま

なんかなあ

明日郡市やって言うし

えー

そんなん知らんわあ

今日

ここに偶然があって

曇天の心が明けたとき

皆が自然に集う

新しい風

懐かしい風

もう一度吸い直して

さあ

行こう

明日を輝かせるために

「融点」

あの日の私

テスト結果が欠点ギリギリで

たったそれだけで

世界の終わりみたいな気持ちになって

眠れない

焦り

不安

襲い来るワニみたいに

強迫観念が

私を支配する

もう

逃げられない

そう言うみたいに

怖かった

誰も

いないことが 怖くて

あなたがいて欲しい

そばに

いて欲しかった

世界の果てを

世界の終わりを

空の彼方を

見るなら

貴方といたい

叶わない願いでも

「沸点」「融点」(後書き)

「沸点」

湧き上がる喜び。

「融点」

氷づけの叶わぬ恋。

「Again」「Even If」

「Again」

あの日のまま

なにもかも

すべて

変わらない

揺るがない

ものがある

きっと

あの景色の意味がわかる日が来る

走り抜いて

走り抜いて

たどり着いたところに

あれはある

今年も見たい

去年も見たい

一年で

三日しか見られない

あの輝かんばかりに萌える

山々を

あたしは知ってる

サンセットの美しかった海より

紫に染まった空より

なにより

雲海広がる

あの白い景色が一番美しいこと

あたしは知ってるから

「Even If」

願いなんていらない

言葉なんていらない

望みだつて捨てたの

あなたが好きであることを

この想いを

捨てることほど辛いことなんてない

脳裏に

あなたの顔が蘇る

タータン

サークル

砲丸

円盤

いつか

合宿で追い抜かされて

ちくしょ

負けた

このやる

負けてたまるか

種目的に負けたくないんじや

女子とかカンケーねえ

なんて

思ってた

あのあと

まさかあなたもそうだったなんて知らなくて

よっしゃ抜かしたった

女子に負けてたまるか

そう思ってたなんて

ちょっと嬉しくて

ああ

もし

あの日に帰れたなら

幸せなあの日に

たとえ

叶わない願いを捨てたと信じていても

この願いだけは

捨てたくなかったのに

捨てていないと信じていたかったのに

「Again」「Even If」(後書き)

「Again」

もう一度

あの雲海を見よう

空の果てを探しに

「Even If」

たとえ

実らない恋を知っても

捨てない希望はあったはずなのに

「追い風」「届かない空」

「追い風」

息が

切れる

遠くに広がる線路が

無限に続く気がして

風を切る

その音さえ

もう聞こえない

輝いていたのは

もう昔の話で

今は

ただ

終わりが見えなくて絶望してる

だけど

横に道があっても

私は行かない

あなたに会いたい

「届かない空」

ゆうひがきれい

あの死にそうな夕日

きれいね

そんな 夢を見た

赤

紫

青

橙

綺麗だけど

なぜ 死にそうなの

暗示された未来のようで

わたしは跳ね起きた

左は青と紫と赤

右は橙

不思議なコントラストで

私を襲う

半分の月が

左に浮かんた

空は

闇に魅せられていた

さよなら

昨日のわたし

「追い風」「届かない空」(後書き)

「追い風」

もう一度

行こうと思うの

七月の終わりの

君との想い出

「届かない空」

もう二度と

同じ空は見られないのよ

サヨナラ

さよなら

「指先の風景」「ペーミン」

「指先の風景」

雨があがったら

デートへ行きましょう

観覧車の見える

電車にのって

こうやって

なんば行きの急行電車を待つのも

いまは楽しい

空は

雲の波が立ってる

嵐が来そうな空ね

急行が駅について

あなたは うん とだけ

次降りよう

からんとカーテンを上げて

あなたは言った

右肩にショルダーバッグ

ねえ

左は空いてるんだけど

さりげなく彼の右に立つ

なのにあなたは両手ともポケットに突っ込んで

向こう斜め下に顔を落として

ちよつと

こっち見なさいよ

さっきから口数少なすぎなのよ

口には出せず

ま　　いいか

こいつは昔からこうだった

ふふつと笑うと

な　　なんだよ

真っ赤な顔で

あんた可愛いなって

男にそれはほめてないだろ

最大級にほめてるけど

改札を通って

左に曲がって

信号待ち

左手に引力を感じて

彼の肩に倒れこむ

い　今さらなによ

別に離してもいいけど

俺嫌だし

振りほどけばいいだろ

むう

言い返せないあたし

嬉しくて

うつむいてしまう

交差点

信号が変わって

あたしたちも歩き出す

行くぞ

そう言って

すたすた引っ張ってくあなた

だから可愛いって言ってるのよ

あたしは笑う

耳まで絵の具の赤みたいよ

好きよ

ポツリ

聞こえないと思って漏らす

俺もだよ

間があいて返ってきた言葉

滅多に言わないのに

あなたがあの日好きってあたしに言って以来

はじめて聞いたわよ

嬉しくて

照れ屋なあたしたちは

身を寄せてもたれあつた

互いの顔も見れず

でも誰よりも一番近くにお互いを感じながら

「ペパーミント」

焼き付いて離れない

君の笑顔

焼き付いて離れない

君のキス

焼き付いて離れない

君の温度

焼き付いて離れない

君の感覚

焼き付いて離れない

君の言葉

焼き付いて離れない

君の視線

焼き付いて離れない

君の匂い

こんなにも

私は憶えているのに

遠い記憶が

遠く感じられないのに

まだ

こんなにも好きなのに

背の高い向日葵が

あなたを思い出させる

目覚めても目覚めても

あなたはもういないのに

わかってるの

だけど私を許して

あなたの置いていったものが

私にいっぱいいっぱい思い出させるのよ

ペパーミントの歯磨き粉も

いつか甘く感じられるかしら

あなたのキスが

ペパーミント味だった頃みたいに

「指先の風景」「ペパーミント」(後書き)

「指先の風景」

幸せをいっぱい

こんな理想を

私はいつか描いていた

「ペパーミント」

甘い甘いイチゴ味より

あの頃は甘くて美味しかったの

「my shine」好きなあなたへ」

「my shine」

背中に写る

背中に映る

君を見ていた

その上に乗る君が

どこか美しく見えて

遠い人だと

胸の奥に沈む

傷に染みた

絆創膏なんてなくて

痛い

もう治らない傷が開く

笑う君を

目のファインダーに収めたくて

何度もまばたきをする

そばにいたのに

君はぜんぜん気づかなくて

笑いながら通りすぎていった君

まだ癒えない傷

痛くて痛くて

何度も自分を追い込んで

そうしてまた傷付くの

心に残る爪痕

君の背中にも残してやりたかったけど

そんな日は来なくて

自分につけてた

痛いよ

気付いて

あたしはここにいるのに

まだ疼く胸

放送に流れる

君の名前にまだ反応する

秘密の花園

帰れない場所

ルージユをシャツに残すの

それが君の名前になること

誰が気づいてくれるのだろう

心の奥底に眠る

あたしの初恋

君に気付いてほしいだけだったのに

「大好きなあなたへ」

最後まであなただけです

夜の空のように綺麗なあなたを

眺めていました

楽な恋じゃないとわかっていたからこそできたのです

今でもまだ好きです

隣にいるような感覚がいつもあたしを襲います

幸せを感じるつかの間を

愛しさを抱きしめています

昼下がりの陽のように輝くあなたを

とても遠く感じてもしました

すべてのものが残酷に美しく見えて

希望も絶望に変わる中で知ったのは

あがらないほどの幸せと

色鮮やかな景色と

刺激が走る甘い痛みと

手から伝わる熱と

瑠璃色に輝くあなたの秘密

大好きでした

清らかな恋でした

知れば知るほど甘美だったなんて

目を疑うほど綺麗で

手からゆっくり力が抜けました

糸はもう切れていました

積木を崩すように

また崩れていったのでしょうか

でも私はもういいの

もう逢えないと気付きましたから

「my shine」「大好きなあなたへ」(後書き)

「my shine」「大好きなあなたへ」合同あとがき

私は今も生きてる

すべて背負って生きてる

レールの上なんて歩かない

涙はこぼれてるけど

いつだって想い出があるから

でも逢うたびに好きになる自分もいるのです

秘密の暗号は大好きな人へ。

「ラブレターを君に」「近づいてXX」

「ラブレターを君に」

広い世界

鏡写しの貴方が

ルーツを探しに出掛けるの

引っ張ってく

カーテンの向こう

ルームチェアがぐるりと回った

秘密のキス

影に隠れて

ルージュが赤い

日差しという名の視線がきつい

風という名の吐息も熱風

ルール無用の太陽は貴方なのに

左手に花束が

枯れ木の季節に咲く花

留守番電話に声を残す

なつかしいこえ

んつとこえをあげる

どんなときもきみだけ

もれるこえでわかるでしょ

よるがあけない

ぶれーきがきかない

なつの

まちがい

えがおがきえたひ

いまもおもう

つみのように

まぼろしがあたまをよぎる

できることならわすれたいのに

もつれるわたしのころ

きこえないことば

みずのなかみたい

がらすのようなこえはとどかなくて

すぴーどをあげていちみりでもちかくに

きみのもとへいきたい

かおがみたい

ながれるじかんがもどかしい

よせてはかえすそのおもい

りゆうもなくなるしくなるのです

「近づいてXX」

熱のこもった私のカラダ

倒れた体にかかる水

冷たくて

だけど嬉しくて

涙がこぼれる

お久しぶりです

声をかけると

ああ

と わかりきつたように返された返事

ケータイが響く

水の感覚を忘れないように思い出しながら

コールに応答した

何号車に乗ってる

あなたの質問に戸惑う

周りを見て

数字を言った瞬間だった

駅の名前が二回放送されて

ドアが開いて

目の前にいた貴方

ケータイを耳に当てて

呆然としたのもつかの間

来い

ずかずか車内に入ってきて

ぐいぐい引っ張られる

ちよつとなによ

電車が出て行く

電車が行ってしまってから

重ねられたXX

甘い唇が

私を酔わせる

そのキスは

あの水のように

私を濡らした

「ラブレターを君に」「近づいてXX」(後書き)

「ラブレターを君に」

内容は支離滅裂

だけどラブレターなの

ねえ気付いて

私からの一文字一文字を

「近づいてXX」

甘いキス

嘘だと知っていても

溺れそうになる

「鳥籠からの脱出」「人差し指で塞ぐ言葉」

「鳥籠からの脱出」

記憶の遥か遠く

君が消え始めている

思い出に変わっていく音だと

私は気づいていた

割りきることはできない

諦めることもできない

そう

思い込んでいただけかも知れない

昔の記憶を

忘れなくなっただけかも知れない

遠のいていく君

いいえ

私が

遠のいただけ

忘れ始めた心

消え始めた君

さよなら

もう少し待ってて

「人差し指で塞ぐ言葉」

つまらない嘘

透きとおった

壊れやすい硝子のような

お見通しなのよ

嘘つかないでちょうだい

なんて言えない

優しい嘘

ってわけじゃないけど

突き通さなければならぬ嘘

好きだと言えない恋だから

お墓までとは言わなくても

せめて明日まで

私の名字が変わるまで

「鳥籠からの脱出」「人差し指で塞ぐ言葉」(後書き)

「鳥籠からの脱出」

さよならまで

あともう少しだけ

「人差し指で塞ぐ言葉」

あなたに

塞いでほしいと思っていたのに

「窓ガラスを隔てて」「冬の空 夏の風」

「窓ガラスを隔てて」

ぐつと詰まる胸

止まったような時間

いますぐバスを止めて

振り返る

君がいる

もう手の届かない笑顔の君

忘れたと思っていたそれを

不意に思い出させる

意地悪な君

後ろ姿

見ただけで気付く

確信に変わる横顔

スローモーション

奪われる視界

追いかけた私の瞳

君が私を見ることはもうない

だけど

期待してしまう身勝手な私

振り返って

手が届いたなら

声が届いたなら

私に向かって

もう一度

笑ってくれたなら

私の心は

もう一度目覚める

果てのない夢の彼方で

「冬の空 夏の風」

寒い

早く早く

私を溶かしてほしい

声をかける

熱い心

届いた声に

みんなが微笑む

みんなの心を

初めて知った

一人だと

孤独だと

そう思っていた私を

変えてくれた

塗り替えてくれた

また新しい居場所を

私はまた

築けるだろうか

「窓ガラスを隔てて」「冬の空 夏の風」(後書き)

「窓ガラスを隔てて」

今日の出来事その一。

このぼっぽえーむ久しぶりの投稿作品一発目。

あー意外に気に入ってる。

久々に書こうと思った作品。

これ書きたいがために眠らせてたぼっぽえーを叩き起こした。

「冬の空 夏の風」

今日の出来事その二。

これもいい。

支えられていることに、随分経ってから気付く。

ピリオドを（前書き）

活動報告のままです。

ピリオドを

お久しぶりです蝶々です。

前回活動報告を書いたのが3/1、すでに二ヶ月たっております。

早いもんです。

――変わりゆく人の心に

私もそのうちの一つなのでしょう。

先日、移転作業の全工程が完了しました。

特に図書館の移転作業なんて、校正もかねての移転だったので気が遠くなるような思いで…。

やっぱりドコにでも流行りはあるんだな、というのがこの一年なるうで書いて思ったことです。

前のサイトにもありました。

私は流行りに乗れない人間です。

音楽もファッションも、なんでもそうです。

自我が強いんでしょうか。

結局、自分のサイトを持つことで流行りという概念から離れられました。

ついったのふおろわさんたちから、また一緒に、創作のこととか色々学んだり、話したりしてます。

結局はかまってほしいというわがままから起因していたのかもしれないです。

今日でここの更新は無期限停止とします。

なろうアカウントもすべて残していきます。

お気に入りとかも外されてしまうかもしれないですが、仕方ないと思います。

先に書いたとおり、私のわがままから起因しているのでしょうか。

今後のHPの方針としましては、

- ・ 図書館で逢いましょう
- ・ 恋愛純度
- ・ 天然教師。

は移行後も引き続き連載

・ 鍵盤を奏でて
は移行後に完結

- ・ STOP
- ・ 七日間の永遠を君と
- ・ 猫

は移行（なろうにて完結済み・ついでにHPにも移行済み）

その他、ここで掲載していなかった中編をいくつか載せていくつもりです。

ここにのみ残し、HPに掲載予定のないものは、

・ 図書館パーソナルデータ（最近ライブラリデータベースに改名して載せようかとも考えましたが別案が採用されましたので予定は立ってません）

・ 七日間シリーズ（単発で掲載した分）

・ 魔女の魔法（続かなくなってしまったのでまったく違うシリーズな話にしてHPにて掲載予定があります）

・ 蝶々のつれづれポエム（全作品を置いていくつもりです。現在は掲載予定はありませんが、もしかするとHPにシークレットページでも作って掲載するかもしれません）

そして最近、アルファポリス様のほうで配信させていただいており
ました「蝶々の気ままに短編。」というメルマガも無期限配信停止
となりました。

続行不可と判断しました。

近く「誰かに贈る一冊」も配信停止になる可能性が浮上しています。
HPやツイッタで似たようなことを続けていく可能性はありますが、
アルファポリスに顔を出すかどうかはもう結構怪しいです。

やりすぎると駄目、というのを身にしみて実感しました。

連載四つというやりすぎだけにとどめるよう善処を尽くします。

今までお付き合いくださいましてありがとうございました。

これからも蝶々は必ずどこかで書き続けます。

風が止むことはきつとないでしょう。

だからこそ私は書くのだと思います。

そう、七日間がすべての始まりだからでしょう。

彼女たちが教えてくれたことが、今の私を突き動かしている。

美穂や伊織が私をスターと地点に立たせ、

ポエムが私の胸を締め付けるような快感に突き落とし、

菊人やき、千鶴たちが私の心に雨を降らし、

伽耶乃や雅生、昴たちが若き日々の足跡を思い出させ、

観月や篤が私を育て、

ぴあのや奏が新しい世界を切り開き、

釉生や陶真、季和が私を未来へといざなうのでしょうか。

書くことの幸せを、すべてにちりばめて。

ではこのあたりで筆を止めましょう。

この新天地が最後の移転先となることを信じて。

2
0
1
1
/
0
5
/
0
2
深夜
蝶々

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7932k/>

蝶々のつれづれポエム。

2011年9月5日16時27分発行